

技術移転という仕事

—インドネシアにおける固形廃棄物処理に関する技術移転—

大澤正明

ひところ小中学生の間でプロミスリングというのが流行っていた。糸で編んだ輪っかを手首につける。風呂に入る時も寝る時もテレビを見ている時も勉強する時も雨が降ろうが雷が鳴ろうが食卓でもトイレでも決してはずしてはいけない。いつか（決してそんなことは起きないと思うが）奇跡的にその糸が切れることがあればその時が願い事が叶う時なのだという。まるで宇宙の神秘に挑戦するかのような壮大なロマンなのだ。

赴任前、娘が私のためにプロミスリングを作ってくれた。ブルーとピンクの糸で編み込んだ決して上品といえる色合いではなかったが、私は嬉しかった。「どんな願いをかければいいのだ」と聞くと、「インドネシア人と仲良くできて、よい仕事ができるように」という。初めての海外での仕事が不安で心細かった私はかなり感動した。よい娘を授かったものと神にも感謝した。しかし、いい年をしてそれを手首につけるわけにはいかない。インドネシアに日本の恥をさらすようなものだ。だから、新しく買い求めていたシステム手帳のリングにくくりつけた。しっかり固定していたので決して切れることはない。ということは、私の願いは叶えられることがないということだ。現に、2年間の任期を終え帰国した今も、切れることもなくしっかり結びつけられたままだ。

プロミスリングに託した私の思いは満願成就とまではいかなかった。たしかにインドネシア人と仲良くはできたが、彼らの役に立つ仕事をしてきたと自信を持って言うことはできない。努力もしたし、私の持っている能力のすべてを捧げてもきたが、やはり自信がない。それは、たぶん、娘が作ってくれたプロミスリングの強度に問題があったということではないような気がする。

(平成8年)

1. 技術移転という仕事

新しい職場のすぐ横を幅2・30メートルほどの川が流れている。まずその川の色に驚かされた。黄土色というか、ウンコ色というか、透明度が皆無なのだ。

そのウンコ川で子供たちが大きなタイヤチューブを浮輪代わりにして水遊びをし、母親らしきグループが洗濯をしたり体を洗ったり歯を磨いたり。

川の向こう側は低所得者街になっていて、廃木材を寄せ集めて作ったような小屋が並んでいる。トイレがないらしく、時々川に尻を向けてウンコする。彼らからは尻が見えないが、こちらからは丸見えだ。比べてみると、確かに尻美人というのが存在する。やはり丸みを帯びた肉厚の女性の尻はいい。排泄という色気のない行為なのに、ほのぼのと「いいなあ」と思う。

職場の隣はイスラム系の学校だ。お祈りの時間になると拡声器のボリュームを目一杯あげて何やら訳の分からぬお経をがなりたてる。ひたすらうるさいのだが、間延びしたうなり声はどこかのんびりして、「いいなあ」と思ったりもする。

風景は何もかもがすばらしかった。思い描いていたとおりのアジアがそこにある。しかし、問題は仕事だった。うまくやっていく自信がなかったのだ。

私の新しい職場は、インドネシア水道環境衛生訓練センター。未来の地球環境に目をやらなければいけない先進国と違って、途上国の場合は現実的だ。いま生きている人間の命を守るために環境を変えなければならない。劣悪な衛生状態のために死ぬ人間がたくさんいるからだ。ごみや汚水を衛生的に処理して河川を浄化し、清潔な上水を供給することがとりあえずは要求される。そのための人材育成を目的として建てられたのがこの建物。日本の無償資金援助である。

建物を提供したら、中身を充実するための手助けも必要になる。教材を揃え、それを十分に使いこなすことができる講師陣を育成しなければならない。

私の仕事は技術移転だという。はじめ<移転>という言葉には違和感があった。技術と

移転という言葉がうまく繋がらなかったのだ。移転とは、物を移しかえること、手っ取り早く言えば引っ越しだ。技術の引っ越しとはいったい何だろう。

たぶん、それはこういうことだ。

私の持っているもの、知識とか経験とか判断力とか、ささやかではあるけれど、そういったものを根こそぎ引き渡すということなのだろう。そう考えると移転という言葉もなかなかいい。教えるとか授けるとか、そういう言葉よりもずっと謙虚で親切だ。それは、ちょっと感動的なほどいい言葉だと思う。人を助けるにはそういう姿勢が必要だ。

しかし、大きな問題があった。私には引っ越し用のトラックがない。技術を移し渡すために必要な言葉、英語が苦手なのだ。受験英語から遠ざかってすでに三十年にもなろうとしているし、まして英会話など勉強したこともない。白人であろうと浅黒い人たちであろうと、外国人とみれば「三步下がって異人の影を踏まず」の典型的な日本人なのだ。

おまけにインドネシア人の英語ときたら文法メチャクチャながら、ひたすら早口、ついでに巻き舌。Rの発音を思いっきり巻いてしまうから、「ミスター」が「ミストルルル」と聞こえる。わけの分からない発音ながら自信たっぷり、流暢に話せない日本人を笑い者にする輩もいる。英語なんかナンボのモンじゃいと割り切ってしまう方がいいだが、私にはそれができない。英語ができないのはアホで田舎もんで無教養でという意識があるものだから萎縮してしまうのだ。インドネシア人スタッフからペラペラと話しかけられたのにさっぱり聞き取れず、「エッ？アッ？ナニ？」を繰り返す惨めさといったらない。挙げ句の果てに、「オーケー、オーケー」とにっこり慰め顔で会話を中断されると泣きたくてしまう。こんなことで技術を伝える仕事をまっとうできるのだろうか。不安で不安で頭が真っ白になる。真っ白になるとますます言葉が聞き取れない。そんな状態がしばらく続いた。

やっとトラックとはいかないまでもささやかな荷車を手に入れた頃、もう一つ深刻な問題に直面した。

「教えることがない！」

技術移転のためにやってきたのに、伝えるべきことが何もないのだ。私の担当はごみ処理なのだが、たとえばごみ焼却技術を教えようにもこの国にはごみ焼却施設がないし、この先しばらくは建設される予定もない。ごみ焼却施設はある程度の経済力がないと維持することができないからだ。また、たとえばリサイクルの知識を移転しようにも、この国のリサイクルはすべて人手に頼っているから、機械化すれば彼らの職を奪うことになる。市民に対するごみキャンペーンを行ったにしても、日々の食い扶持に汲々としている人々が関心を示すとは思われない。ごみを収集する方法を考えるにしても、肝心の収集車の絶対数が不足している。

もともと、ごみ処理の方法には決まったパターンがあるわけではなく、その都市の汚染状況や経済力、人々のライフスタイルを見定めて、引き出しの中から最も適当な方法を選んで作りあげていくべきものなのだが、インドネシアがどんな国なのか皆目分からない。ならばデータを調べてみるかということで、情報局の統計資料を片っ端から調べてみるも、どれも信憑性に欠ける。

それはそうだ、大小1万数千の島からなるというこの国にはいろんな人種が混在している。肌の色の白い人もいれば、浅黒い人もいれば、真っ黒な人もいる。年から年中暑い国なのに皮ジャンを着たがる人もいれば、コテカというペニスケースだけを身につけている人もいる。

スマトラ島と聞けばゾツとするし、ボルネオ（現カリマンタン）島と聞けばもっとゾツとする。日本の若い女性がコロリと騙されてしまうというジゴロ男のバリ島もあれば、セレベス（現スラウェシ）やニューギニア（イリアンジャヤ）という戦時体験を持つ日本人には馴染みの島もある。

高層ビルが林立する首都ジャカルタ。しかしそのすぐ裏には掘立て小屋が密集しているし、日本よりもはるかに目にする機会の多い高級車ベンツと、バジャイという2人乗りがやっとの三輪タクシーが併走するという光景にも頻繁に出会うことができる。

住む島も違えば人種も違い、貧富の差や教育レベルの差も天と地ほどの隔りがある。

このような国でまともな統計などありようもないし、たとえきちんとしたデータが得られたとしてもそれが一体何の役に立つというのだろう。日本のように、右を見ても左を見ても同じ暮らしをして同じ趣味を持ち、悲しくなるくらい同じライフスタイルをとっている国ならば、数値の平均イコール国の顔ということになるのだろうが、インドネシアの場合は数値の平均を見てもこの国の性格を把握したことになる。裕福な少数は圧倒的に裕福だし、貧しい多数は圧倒的に貧しい。数値の平均がこの国の中間層の生活レベルを示しているとは限らない。むしろ、この国で最も少ない階層のデータと言えないこともない。

誰のための環境対策なのか、誰をターゲットにしたごみ対策なのか、それすら見えてこない。戦う相手の顔が見えないというのは困ったことだ。

それに何をすることも金がないこの国で、金を使わない環境対策や衛生対策があり得るのか。たとえ、あったとしてもそれがどれだけの価値があることなのかが分からない。

たとえば、生まれたばかりの子供が1年以内に何人死ぬかという乳児死亡率というデータ。衛生のレベルを知るための指標の一つなのだが、日本の場合は1000人にわずか4人であるのに対し、インドネシアの場合はその十倍強。この差を衛生対策で縮めたいと思う。しかし、クーラー、テレビ、バス・トイレ、見舞客用ソファ付きの豪華な病室に入院できる者もいれば、この暑い国でクーラーもない病室で我慢しなければならない者もいるし、もちろん大多数は病院で入院生活を送ることすらできない。たとえ、日本と同じような衛生状態を確保したとしても、この問題が解決されない限りさしたる乳児死亡率の改善は望めないだろう。

それに、どだい日本と同じような衛生状態を確保することなどできるわけがない。日本の環境衛生対策は金にあかせて発展したものだ。スーパーマーケットのパックとラップは食品衛生を格段に向上させただろうし、ごみを全量収集して焼却することによって蠅やネズミは大きく減少した。薬品まみれの害虫駆除にしても、企業の公害対策にしても、水道、下水の普及にしても、あらゆる対策は豊富な

経済力が背景になっている。経済力のない状態で環境衛生を向上させよといっても、私たちには手も足もでない。まして、すでに弊害が見えてきているその金満対策を途上国に押しつけるのはフェアとはいえない。

かつて日本には<清貧の思想>があったというが、たぶん<清貧の技術>は存在しなかった。結局私は2年間で清貧の技術を見いだすこともなく、ただひたすら金満の技術を移転してただけだが、それはおそらく私の器量だけの問題ではない。日本という国と国民の器量がその程度だということだと思ふ。

2. 貧しくても平気か

大量生産・消費社会の弊害が指摘され、ライフスタイルの見直しが叫ばれ始めた頃、しきりに、<Back to the Past>というスローガンがもてはやされた。

過去に戻る、つまり、豊かでない生活、便利でない生活に戻るということだが、それはいったいいつの時代を視野におけばいいのだろうか。江戸時代という人もいれば、いやもっと先だという人もいるが、ちょっと遠すぎて想像もできない。

だから、とりあえず1960年代。

この時代を境にして日本人のライフスタイルは大きく変化している。

ざっと挙げただけでも、

・エネルギーが固体燃料（主に石炭）から液体燃料（主に石油）に急激に変化。

	(1960年)	(1970年)	(1998年)
固体燃料	54.3%	25.7%	23.6%
液体燃料	37.0%	69.7%	56.9%

・エンゲル係数が大きく減少し30%台に入る。

・核家族化が進み、この時期に1世帯3人台に入る。

・3種の神器といわれた電気洗濯機、白黒テレビ、電気冷蔵庫など家電製品の普及率が飛躍的に増加。

また、この時代に新聞の広告収入が販売収入を上回るようになったことも、大量消費誘発型社会の幕開けとして象徴的な出来事だと思ふ。

それでは、60年代の生活を現代の日本人が受け入れることができるかとなると、どうも

確たるイメージが湧かない。私たちの多くは物質文明が存在する中で育っており、存在しない状態がどういうものか、あるいは存在するけれどそれを利用できない生活がどんなものか理解が及ばない面がある。

そこで、インドネシア。

「インドネシアの生活レベルは日本のどの時代にあたるのか」ということをよく聞かれるが、データで見ると、日本の60年代かあるいはそれ以前ということができるかと思う。

とはいえ、前述したような地域差、貧富の差。たとえば、ジャカルタ市の場合、私たちが日本で目にする物は、（多くの人はそれを手にできないにしても）、ほとんど何でもあるとっていいかもしれない。

一方、地方に行くと、そういった物を目にするこゝとさえできない。

つまり、私は二つの興味ある自己実験ができることになる。一つは、存在する便利さ快適さをどれだけ我慢できるか。もう一つは、存在しない生活にどれだけ満足できるかということだ。

そういう視点からこの国の生活を体験してみたいというのも職業的な目的の一つだった。

その自己実験の結果をいくつか紹介したい。

	インドネシア (1990)	日本			
		1960	1990		
世帯サイズ(人/世帯)	4.5	4.52	3.01		
乳児死亡率(人/千人)	75	49.3	5		
平均寿命 (才)		男	58.5	65.3	75.4
		女	62.0	70.2	81.2
産業別 就業者数 (%)		1次	56.6	32.7	6.7
		2次	12.8	29.1	33.8
		3次	30.4	38.2	58.8
テレビ普及率 (%)	60	73	620		
自動車保有台数 (100人中)	1.4	1.5	46.5		
電話普及率(100人中)	0.5	3.9	43.2		

さて、まずは自動販売機。

使う身になってみると自動販売機に罪はない。えらい！としかいいようがない。こんな便利なものはめったにないといつていいかも

しれない。必要な時はいつでも利用できるし、ほんの100メートルほど歩けば清涼飲料水とタバコならばまず間違いなく手に入れることができる。お金を入れるだけで誰に煩わされることもない。無愛想な店員もいないから、気ままだし、自由だ。しいて欠点を探せば、商品とおつりを身を屈めて受け取るという屈辱感だけだ。

一方、設置する側にとってみれば、場所を提供するだけで天から金が降ってくるのだから、これはもう神様の領域だ。

消費者のニーズにぴったり合って、販売者も大喜びとなれば、文句の付けようがないのだが、しかし、環境問題としてみると悪玉の象徴として確固たる地位を築いている。

まずは消費電力。決してばかにできる量でないのは言うまでもないが、手抜き金儲けを貴重な資源でカバーするという性根が間違っている。

それに、空き缶の処理。自販機周りの空き缶の散乱はかねてから問題になっていたが、最近ではごみ箱を設置することが義務づけられている所が多くさして目立たなくなってきたような気がする。今問題になっているのはリサイクルの問題だ。たとえば市町村のごみ収集で、「スチール缶」「アルミ缶」「白びん」「茶びん」「その他のびん」の5種分別をしようとしても、自動販売機ではすこぶる難しい。現在はせいぜい「缶」「びん」「その他のごみ」の3種類ですんでいるのに、5種プラス「その他のごみ」の6種類のごみ箱を置くことは不可能に近い。自販機をズラリと並べたコンビニエンス・ストアの店先はごみ箱だらけということにもなりかねない。当然、神の恩恵に浴している人にとって許せない景観だ。神にごみ箱は似合わない、(たぶん)主張するだろうから、市と販売店の喧嘩になること請け合いだ。

そんな具体的な問題の他にも、楽しんで金儲けをする風潮が安易な犯罪を犯す子供を作る原因になるのだとか、人と接しなくても物が買えるという世の中が、コミュニケーションをとることが下手な子供を作るのだとか、環境問題を越えたきつい指摘もまんざら誇張とは思われない。

ジャカルタには自動販売機がない。どこか

で見たことがあるという噂は耳にしたことがあるが、私自身は見たことがない。

理由は簡単だ。一つは治安の問題。お金と商品がびっしり詰まった自動販売機を道路脇にでも設置しようものなら、一夜のうちに跡形もなく消えてしまうだろう。今一つは、投資効果の問題だ。高い設備費と維持費を考えれば、人間の手で売った方がはるかに安上がりだろうし、まして仕事がなく困っている人が大勢いるのだ。

さて、この国にやってきて、自動販売機のない生活を2年間経験した。過去に自動販売機の恩恵をうんざりするほど受けてきた私が、その必要性について、今、どう感じているかというと、

<自動販売機はいらない>
と思う。

最初の頃は、タバコを切らした時など、夜でも気楽に買いに行ける自動販売機が存在が、なんとも懐かしく感じられたものだったが、慣れてくると買い置きに気をつけるようになるし、なければならぬ我慢する術も覚えていった。缶ジュースの類もほとんど飲まなくなった。暑い所では、水が一番おいしい。自動販売機は、やはり、無理矢理消費型の典型だと思う。

とはいえ、この国もいつか経済力が向上し、人件費が高くなれば、自動販売機が出回ってくるだろう。そして、人手もいらず濡れ手に泡でお金が入ってくる、こんなうまい商売あるだろうかとなるだろうし、身近な所にあればついつい利用したくもなるだろう。



街中の屋台(タバコ、ティッシュ……大概のものは揃っている)

環境対策を語る時、私たちのライフスタイルに係る問題として必ずといっていいほど登場する言葉がある。一つは「贅沢・便利」という言葉。「贅沢や利便性を志向する近年のライフスタイルが……」というような使い方。そして「もったいない」とか「マナー」という言葉も頻繁に登場する。「近頃の日本人は」「最近の若者は」といった接頭語を付けて、それを失ってしまった現代の世相を嘆くというスタイル。そして、そういったことを正しい姿に戻すことが環境対策の唯一の解決方法であるという議論。

果たして私たちが贅沢や利便性を拒否できるだろうか。もったいないという言葉を取り戻し、あるべきマナーを守ることができるのだろうか。物質文明の恩恵がまだ充分に行き渡っていないインドネシアならば、そのヒントを与えてくれるに違いないと思っていた。

しかし、結論からいうと私はそれをことごとく否定しなければいけない。私たち日本人にはく所有に対する欲望を最小限に制限することで、逆に内的自由を飛躍させるという清貧の思想があったというが、それは違うと思う。たとえ、そういう思想があったとしても、それは元々やむに止まれぬ経済状態がさせたもので、この経済状態の下でそれを望むのは無理ではないかと考えるのが自然ではないだろうか。

そういう結論にいたった出来事を思いのまま挙げてみよう。

帰国を前にした引っ越しの荷造り。テレビやベッド、ソファ、書棚、食器棚、ガスコンロ等などという大物はすべてレンタルだから問題ないが、2年間の生活で買い集めた民芸品や日用品はかなりの数に上る。なにしろ、230m²の大邸宅に散りばめられた諸々の生活用品のすべてを100m²の兔小屋に持ち帰るわけにはいかない。絞りに絞った持ち帰り品を除くすべての品を、我が家の3人の使用人とその友人計4人に分け与えることにした。

日本ではとても着れない南国衣装に少し古くなったワイシャツやズボン、食器にサンダル、プロパンガスボンベ、ラジオに使い捨てライター、栄養剤にサロンパス、ボールペン、

乾電池にいたるまで、ズラリと車庫に並べられた文字どおりのガレージセール。次々と各自持参の段ボールに納められ、バジャイ（3輪タクシー）をチャーターして急ぎ自宅に持ち帰る者、いつの間にかやってきた親戚に持ち帰らせる者、段ボール十数個があつという間に消えてしまった。

この国にいと、くもったいないという光景に頻繁に遭遇することができる。私達が古くなったと感じるレベルあるいは消耗したと感じるレベルよりも一段二段低いレベルまで使い切ってしまうとする。

家内は、着古した下着を捨てる時、必ず鉄を入れる。自分の下着を誰かに着られるというのはおぞましいものだという。

家内の友人がこちらの庶民の生活にとけ込むべく、勇を振るって市場（パサール）に買い出しに行き、おいしそうな駄菓子（好きになろうと努力する者にとって、あらゆる食べ物が魅惑的に見えるものだ）を購入したときのこと。B4版大の粗末な藁半紙に無造作にくるんで渡された。

「すばらしい簡易包装。日本人もぜひ見習うべきだ」

いたく感動し、ふとその包装紙を開いてみると、なんと、わが子と同じ日本人学校の同級生の答案用紙。新聞と一緒にリサイクルに出したか、あるいはごみ箱に捨てたかした答案用紙が、食品の包装紙として再利用されている。

究極のリサイクルと言えるかもしれないが、しかし、私たちは彼らのそのリサイクル精神を範とすることはできない。新しい物を買いたくても金がない。物資も豊富なわけではない。日本人が2年前に買ったお古でも、彼らにとってみれば、まだ充分高級品と見なされるというだけの話だ。

彼らのくもったいない精神を見てみると、むしろ、人の物資に対する止みがたい執着心すら感ずる。

私の家庭車の運転手は、娘のために30万ルピアも出して台湾製の自転車を買った。インドネシア製ならば10万ルピアで手に入るのに、それでは隣近所に恥ずかしいし、娘も肩身の狭い思いをするからだという。50万

ルピアの日本製を買えなかったのが心残りだと溜息をつくのだが、50万ルピアといえは彼の月収のほぼ1カ月分に相当する。

私たちから見れば、「そんな無駄金を使うよりも将来に備えて貯蓄すればいいのに」という気がするのだが、彼らはそんなことに頓着しない。金が少しでもあれば、何か物を買う。それも、少しでも高級そうな物、ミエの対象になる物という具合だ。

インドネシア人の包装好きといたら並みではない。ちょっとしたデパートや小物売り店ならば必ずといっていいほどラッピングコーナーがある。それも、テカテカ、ギンギラのだ派手な柄が多く、お世辞にもセンスがいいとはいえない。

15万ルピアの月収の女性がその恋人の誕生日祝いに5千ルピアのプレゼントを買い2千ルピアの包装紙で飾りたてる。それは必ずしもこの国では例外ではない。私はその2千ルピアのけげげしい包装紙に対してクレームをつけることはできる。しかし、そのいじらしい心持ちに思わず口をつぐんでしまうのだ。

インドネシアの独立50周年を記念して、8月1日から1カ月の間、各戸の玄関先に電飾ランプを設置することが義務づけられた。1個5ワットの豆電球が最低10個、多いところでは数十個。聞けば、その間の電気代は半分になったという。安キャバレーと見紛うかのようなけげげしさをあざ笑い、資源の浪費だと罵るのは簡単だが、屈辱的な植民地支配から解放されてやっと50年たったという思いを決して咎めることはできない。

彼らの食事マナーは目に余る。せっかくのご馳走を大胆に残すのだ。日本人ならば、「お百姓さんに申し訳ないから」とか「料理した人に悪いから」とか、たとえ食べ過ぎで腹をこわそうとも残らず平らげるのが子供の頃から教えられた最低限の礼儀である。

「せっかくのご馳走を平気で残すなんて、とんでもなく傲慢な連中だ」と最初は思っていたが、聞けば、残すことが「堪能しました」という意思表示なのだという。

インドネシアの環境マナーのひどさは日本

に比べようもない。

日本でもまだ散見されるタバコのポイ捨て。それを火を消してからするか、火がついたままするかレベル上の違いがあるかどうか分からないが、こちらは後者が常識であるし、また、たとえば高速道路の料金所。貰ったレシートをクシャッと丸めてそのまま路上にすてるのも常識。料金所の周辺は紙屑で真っ白だ。

こういう光景に日常的に接していると、私たち日本人は決してマナーに劣る国民ではないような気がしてくる。そして、ことある度にマナーという言葉や口にしたがる国民性あるいは文明の成熟度に危険な兆候すら感じる。

私たちは何故道路にタバコを捨ててはいけないのだろうか。おそらく3つの理由が考えられる。

一つは人口の集中、一つは路面の舗装化、もう一つはタバコのフィルター。つまり、人口の集中がたかがタバコの吸殻でも環境を見苦しく損ねることになり、住環境や物自体が自然循環を困難にする構造になってきたことが問題なのである。

歩きながらタバコをくゆらすのはマナーに欠けることではあるが、少なくともその吸殻のフィルターをちぎって残りを路肩の地面に捨てたとしたら、私はそのことを咎めることはできない。人口の集中も、路面の舗装も、それがもたらす弊害のすべてを、マナーのせいにして済ましてしまうのは、正しいこととはいえない。問題の本質を見逃してしまうことになるからだ。

ジャカルタを離れ地方の小都市を歩いていると、子供の頃の生活を思い出す。テレビはないけれど、溢れるほどのおやつもないけれど、そこそこに穏やかな生活。時の流れの緩やかさに違和感は感じない。

「お前にはすまないことをしたと思っている」と死の床に就いて間もない父が言った。地方公務員だったので裕福ではなかったが、貧しかったわけでもない。贅沢をさせてやれなくてすまなかったという意味なのだと思うのだが、何故、父が謝るのか分からなかったし、今でも分からない。子供の頃不幸だった記憶もないし、もっと裕福だったらと思った

記憶もない。

少なくとも、いくばくかの本と健康な家族と気軽に声を掛けれる近隣の友人がいれば、私は今でもかなり楽しく生きていけると思う。

問題は、〈どうだ〉とばかりに押しつけられる物質文明の洪水だ。残念ながら私はそれに抵抗する術を知らない。

2年間インドネシアで暮らしてみても痛切に感じるのは、〈なければならぬが、あればそれを拒否することができない〉という人間の業だ。その業が前面に出て来つつあるこの国と、業を出し尽くしたあとでその影響にうろたえている日本と。

そんな中で、私が今日本に送ることができるとメッセージは、

〈なければならぬで、かなり気楽に生きることができると感じる〉

という程度のものかもしれない。

3. 講義をする

さて、技術移転の仕事。

赴任間もない頃のことだ。いきなり、明日講義をやってくれとパートナーがいう。

「聞いてないよ」

それは困る。日常会話だっておぼつかないのに、1時間半の講義をどうやってこなせばいいのだ。聞けば、地方から集まってくる講習生のほとんどは英語がだめでインドネシア語しか理解できないという。その頃の私のインドネシア語ときたら、「ありがとう」と「こんにちわ」が主体で、記憶の片隅にある語彙を総動員しても50に満たなかった。

「No problem」

彼は平然として言う。

「あなたは英語で話せばいい。私がそれをインドネシア語に通訳するから」

「私の英語力はあなたがよく知っているではないか」

「ティダ・アパ・アパ (No problem)。私たちは十分にコミュニケーションを保っている」

「1日ではとても準備できない。日本語なら1時間もあれば大丈夫だが、英語ではその十倍の時間がかかる」

「OK。明日までまだ24時間もある」

私よりも10数才若いパートナーはそう言うにっこり笑った。聞けば、予定していたインドネシア人講師が急に来れなくなったのだという。後になって分かったことだが、こういう外部講師の突然のキャンセルは日常茶飯事で、その度に穴埋めに奔走しているらしい。

さて、どうしようか。まず、テキストを作らなければならない。インドネシア語版のテキストはあるらしいのだが、私にとっては何の役にも立たない。まったく新しいところから作ることになるのだが、これは気の遠くなるような作業だった。日本語ならば、慣れた仕事のことだから簡単だが、英語では話は別だ。それに、話す側も聞く側も英語が弱いから、簡潔にやらなければ眠くなる。わざわざインドネシアくんだりまで来て、慣れない英語で講義して居眠りされたら悲しくなってしまう。考えた挙げ句、OHPを使うことにした。所々に絵を入れておけば数を稼ぐことができるし、退屈されることもないだろう。

結局50枚のOHPシートを作り、一つひとつの説明用文章を考えメモし、シートとシートの合間のつなぎの言葉を考えメモし、せめて最初の挨拶はインドネシア語でしたいということで、メイドや運転手の力を借りて文章を作り暗唱をしてという作業をしているうちに、夜12時を過ぎてしまった。南国の仕事はのんびりしているから、せいぜいリフレッシュしてきなさいという、赴任時のアドバイスはいったい何だったんだ。

実際、最初の1年間の私の残業、つまり無償奉仕は日本にいる時の比ではなかった。打ち合わせをしようにも、会話に自信がないから打ち合わせ用のメモを作る。遠い昔のことながら一応は受験英語の経験はあるから、会話よりは作文の方がまだマシだ。マシとはいっても知れているので、書いたものを英語の先生になおしてもらおう。週に1度プライベートでインドネシア人のおばあさんに英語を習っていたのだ。真っ赤に書き込みを入れられた文章を清書して、さも自分自身の文章であるかのように振る舞うのは悲しい。そして、「あなたの英文は素晴らしい」と誉められるともっと悲しくなる。「日本人は話すのは苦手だけれど、読んだり書いたりするのはさす

がに上手い。その点インドネシア人はペラペラ平気で話すのに、書くのはまったくダメだ。たぶん教育の問題だと思う」と、しみじみ、そんなことを言う。「おまえ、おれの悲しみを知らないな」と腹の中で思うが、口には出せない。

さて、いよいよ講義。研修生は全国から集まってきた地方公務員が10数人。彼らはこの研修センターで2週間泊まり込んでの集中講義を受けるのだ。

前夜、メイドと運転手に添削してもらったインドネシア語の前口上を、まるで学芸会に挑む小学生のように直立不動で述べたてる。天を仰ぎ懸命に記憶を辿っていると、

「おしーん」

何処からかそんなかけ声がかかる。

「ノー、My name is TOYOTA」

精いっぱい笑顔を作って、そう切り返す。

「アジノモトー」

「ソニー」

「プリンセス・マサコー」

「ココロノトモ（心の友）」

何故か五輪真弓の曲が流行っているらしい。案ずるより生むが易しというべきか。それですっかりリラックスできたのだ。

2度3度と講義を重ねるうちに、私のインドネシア語もそこそこ上達し、眠気防止用のインドネシア語ネタも修得する。

<桜田>氏は、ポケット (saku) が平ら (rata)、つまり<お金がない>の意。牛乳はススなので<すすむ>さんは「私のおっぱい」という意味にもなる。<野々村>氏となると、ちょっと文字にはしにくい。そんな類のインドネシア語は研修生が教えてくれる。

都合のいいことに、通訳付きの講義というのは時間がたつのが早い。おまけにインドネシア人のお喋り好きときたら並みではない。OHPシート1枚をネタに、ああでもないこうでもないの議論が延々と続く。講師である私を差し置いて、通訳係のパートナーと研修生の間で早口のインドネシア語が飛び交うものだから、こちらはさっぱり分からない。ひとり取り残されながらも、次のシートの説明文の準備ができるのはありがたかった。

ある程度、インドネシア語の日常会話ができるようになると、専門用語は英語で、つな

ぎの会話はインドネシア語でというように、イ・英チャンポンの講義スタイルができあがる。語彙量は英語の方がはるかに多いけれど、日常会話はインドネシア語の方が楽という、私の語学力に合ったスタイルではあるのだ。

そうになると、通訳なしでも1時間や2時間は苦にならない。「どうってことない」と気楽に構え始めた頃、手痛いしっぺ返しが待っていた。

その日も、得意のイ・英チャンポン、時にイ・日チャンポンの下ネタを混ぜながら気楽に講義していると、前列に座っていた研修生が手を挙げる。

なんと、「英語だけで講義をしてくれないか」というのだ。インドネシア語を使ってもらえるのは嬉しいが、私たちの中には英語が分かる者もいる。お互いに協力して教え合うから、気にしないで英語だけでやってくれないかという。どうやら、イ・英のチャンポンだと、かえって聞き取りにくいらしい。たしかに、それは私にも思い当たる節がある。インドネシア人にも、たまに片言の日本語を話したがる者がいるが、すこぶる分かりにくい。下手な日本語に苛立つせいかもしれないが、英語よりもインドネシア語よりも、はるかに聞き取りにくい。

それに、雑談の中で聞くとところによると、私に限らず日本人の講義はあまり人気がない。言葉の問題もあるし、異国の知識を現地風アレンジすることなくそのまま教えるので面白くないのだという。それはそうだと思う。現地風アレンジするには1年や2年ではとうてい無理だし、それをカバーするために、私がパートナーに教え、それを現地の状況にアレンジしてパートナーが講義するという技術移転のスタイルがあるのだ。

それっきり、私はイ・英チャンポンの、いってみればお調子者講義をやめてしまった。

4. 埋立地の風景

ジャカルタ近郊にある108ヘクタールの広大なごみの埋立地。人口が実質1万人を越えるのではないかともしられるジャカルタ市の大部分のごみがここで処分されている。

日本と違って生ゴミをそのまま埋立てして

いる上に、なにしろ南国。ひどく臭いし、ハエの発生も並みではない。車の窓をしっかりと閉めているといえ、写真を撮るために降りたり窓を下げたりする度に、ハエがどんどん進入してくる。いったんハエが入ると、その埋立て地を離れるまでどうしようもない。ゴミの山にたかっていたばかりのハエに顔のあたりをまわりつかれるのは楽しいものではない。

それ以上に恐いのはスカベンジャーだ。ゴミの中からリサイクル資源をあさっている人たちのことで、老若男女、常時千人近い人たちがゴミの山の中で格闘している。

虐げられた人たちの集団心理についてはうんざりするほど講義を受けてきた。それからすると、決して近づいていけない場所ではある。なにしろ、むこうはゴミを集めるための籠を背負いぼろ服を身にまとい顔も汚れて斑になっているのに、こちらはネクタイはしないまでも一応はこぎれいなワイシャツに革靴で、彼らが働いている傍らを車の窓を閉め切ったまま悠々と走っている。ぶん殴ってやりたいと思っているだろうなあと思ひを感じながら窓を開ける気にはなれない。

いつだったか、雨季で道路が水浸しの時、彼らのど真ん中でエンストしかけたことがあったが、生きた心地がしなかった。「日本人専門家、ごみ埋め立て地で撲殺さる！」なんていうのは格好悪いなあ、親は肩身が狭いだろうなあ、「これを機会に ODA のあり方を見直せ」なんていう論評が出てきても困るなあ。いろいろ考える。

一度だけ、彼らと身近に接したことがある。埋め立て地で試料を採取した時のことだ。頼みのインドネシア人パートナーは私が懸命にスコップを振るうのを遠巻きに眺めるだけで頼りにならない（彼らエリートはそういう肉体労働をしてはいけないことになっているのだ）。スカベンジャー達が物珍しそうに私の回りに集まってくる。子供がほとんどだ。しかし、私も作業服だし、汗みどろでゴミと格闘している。彼らの反発をかうことはないだろう。ふと見ると彼らの顔に同情の色が浮かんでいる。「このおじさん、いい作業服を着て金持ちだろうに、ゴミを相手に何をしてるんだろう」という感じなのだ。

採取したゴミをビニールの袋に入れ、「スダー（終わった）」と言うと、子供達がいっせいに寄ってくる。初対面の握手を求めてくる子供もいれば、名前を名乗る者も、私の子供の数を聞いてくる者もいる。間近に顔を見ると、垢がこびりついてはいるが表情が穏やかで屈託がない。写真を撮ろうというと、さらに 2・30 人の子供が集まって、1・2・3 の合図でいっせいに飛び上がる。いい記念になると思われたその写真に、結局、私の顔が見えていなかった。

彼らスカベンジャーの多くは埋立て地の一角に掘建て小屋を作って生活している。一家揃って暮らしている者もいれば、家族を田舎に残し仕送りをしている者もいるという。

彼らの集める資源ごみといえば、金属や紙という金になるごみはすでに家庭のゴミ箱で集められているので、お目当てはプラスチックとか布が主体。軽やかさばるプラスチックを 1 日集めたとしてもどれだけの金になるのだろうかと思うのだが、それでも彼らの収入は薄給に泣く公務員の上をいくという。衛生状態は最悪だ。泥水の中をサンダル履きという者も多く、破傷風は、肝炎はと思うとゾッとする。せめて安全靴を履くことを義務付けるべきではないかということを進言するのだが、彼らの存在は非公式、見て見ぬ振りの存在なのだから、そういう指示はしにくいのだという。

ここで出会った少女の表情を忘れることができない。小学校高学年くらいだろうか。彼女は埋立地の外周道路にたたずんで、埋立地内で籠を背負い資源を拾い集めている父親（おそらく）を眺めていた。服装は悪くない。少なくとも清潔に見えた。脇に自転車を置いていた。自転車は高級品だ。

少女は怒っているように見えた。眉に皺を寄せ、瞳の奥底から相手を値踏みするような疑り深い眼差し。

しかし、驚くことはない。この地特有の表情だ。おそらく、ちょっと声をかけるだけで表情は一変するはずだ。人なつっこい笑みが顔いっぱい浮かぶはずだ。

「写真を撮っていいかい？」と聞いた。

「いいよー」あるいは「恥ずかしいからダメ」、いずれにしても、こぼれんばかりの笑顔が返

ってくるはずだった。しかし、少女は笑わない。笑わないままカメラの方をじっと見つめた。私は戸惑いながらも、それを同意の仕草と受け取った。シャッター音を聞き終えると、少女は何事もなかったかのように、ゆっくりと埋立地の方に視線を戻した。それっきりだった。

この少女が少女らしい表情を取り戻すために私に何ができるだろうか。それが後半1年間の私の課題になったのだが、結局は何も分からなかった。今でも分からない。



5. フィールド・トリップ

2週間の集団研修の中で2日間だけ現地研修がある。たいがいは近隣の自治体の現場を視察する。1泊2日で最初の日は先方の担当者の説明を聞き討論し、次の日は現場を見て回る。

移動には、訓練センター所有の大型バスを使う。クーラーが付いていないから暑いし、座席も狭い。めったやたらスピードを上げるから命がけのツアーになる。恐いから一番後ろの座席に座る。しかし、この席は車の振動をモロに受ける。振動だけならまだしも、インドネシアの道路はアナポコだらけだから、時々ドーンと大きなやつがくる。一度、それで頭に怪我をしたことがある。勢いよくバスの天井に頭を打ちつけ、血が少し流れた。汗と血が混ざってオレンジ色の血になった。

神戸の震災を知ったのも、このバスで移動

中のことだ。渋滞中のバスを目当てに、新聞やお菓子やタバコやティッシュを売る子供たちが寄ってくる。研修生の一人がその新聞を盗み見て、「あんたの国がたいへんなことになっているようだ」と教えてくれた。急いで購入すると、大きな写真が目に入る。高速道路が陥没している写真だ。誰かが記事を読んで、私にも分かるやさしいインドネシア語に翻訳してくれる。「ファミリーは大丈夫か」と声をかける人がいる。I am sorry……と悔やみの言葉を口にする者もいる。神戸の近くに住んでいる知人はいなかったらどうかと思いつめながら、この国の人たちの暖かさを肌で感じた。

ティッシュなしのトイレを経験したのもこの小旅行の時だ。彼らが泊まるホテルは例外なく質素だ。私には一応個室が与えられたが、もちろんクーラーはない。窓を閉め切ると暑いから、開き戸をあけたまま寝る。蚊が入ってくるから持参の蚊取り線香をたく。2畳ほどの部屋が煙でもうもうとなる。

トイレは付いているが、案の定トイレットペーパーはない。バケツにひたひたの水が入っていてプラスチックの手桶が浮かんでいる。「挑戦してみなければならぬ」と思った。ポケットティッシュを持っていなかったからやらざるを得ないというべきだったのだろう。左手が不浄の手なのだという。だとすれば、左手を使わなければならない。何がなんでも左手だという意識があるから、思わず左手で水桶を掴んでしまう。掴んでしまうと右手しか空いていない。じゃあ、右手でやるのか。違う、右手で水桶を掴むんだ。いや、右手はいけない、左手だ。緊張しているから、何がなんだか分からなくなってしまう。エイヤー、とうとう右手でやってしまった。

<ヌルッ>とした感触。

インドネシアでは慢性的に腹下し気味だから軟便なのだ。

まあいいか、これもひとつの異文化体験。気を取り直してみんなが待っているレストランへ。地方の人と一緒に行動するのだから食事スタイルも彼らに合わせなければいけない。だから、この小旅行では指を使う。親指、人差し指、中指の3本を使ってご飯を固め、口をちょっと突き出し気味にして、ひょいと放

り込む。やってみれば意外と簡単だし、けっこう便利でもある。「ピンタール(上手い)」とか冷やかされ、ちょっと胸を張った時やっと思出す。

「アッ、右手」

異文化体験もなかなか大変だった。

研修が開催されていない時に、パートナーと私だけで地方都市を視察することもあった。何処に行こうかと相談されても、私にはさっぱり分からない。必然、訪問地の選択はパートナーにまかせることになる。

「バリに行きたい」

と言われた時は、目が点になってしまった。それは困る。いくら外国にいるとはいえ、遊びじゃないかという批判は恐い。「バリなんていう観光地は私の趣味じゃないから、行きたくなかったんだ」と叫んでみても、他人はそう思わない。

しかし、バリにはこういう施設があって、こういうシステムでやっていてと説明され、「観光地における廃棄物対策は」などと尤もらしいことを言われると、反論する術がない。

で、結局、私たちはバリへ行った。オフィシャルな仕事でだ。言い訳させていただければ、私たちは8時から5時までしっかり仕事をした。デンパサールの市役所を訪ね情報交換し、施設を数カ所視察した。

しかし、正直に言わせてもらえば、私はこういう視察旅行は好きではない。インドネシア語で議論した後で、「さあ、あなたの意見を」と水を向けられても困ってしまう。話の流れがさっぱり掴めないから、何を話しているのか分からない。せいぜい、帰ってから資料を読み、レポートを書くのが精いっぱいだ。私自身にとっては役に立つが、彼らのために役に立っているとは思えない。

そして、もっと正直に言わせていただくと、アフターファイブに私たちはクタの海岸を散歩した。

クタ近くのロスメンに旅装を解くと、パートナーがTシャツに短パンという姿でやってきて、

「レッツ・ゴー、チャリ・テテ」と言った。<チャリ>は探す、<テテ>はおっぱいという意味だ。クタ海岸はオーストラリアの観光

客が上半身裸で日光浴するので有名な場所なのだ。

で、たぶん<仕方なく>、私も短パンに着替えて同行した。たぶん、これもひとつの国際親善なのだと思う。

そこらにおっぱいがあるというのは、すごい光景だった。視線をどんな風に納めて歩けばいいのか分からない。照れ隠しにニヤつくわけにもいかない。それは下品な田舎者のやることだという気がする。なにくわぬ顔つきで、ただ普通に海岸を散歩しているようであればいけないと思う。

「すごいねえ」

どういう会話をすればいいのかも分からないから、結局、下品で田舎者風な感嘆詞になってしまった。

「日本人はいないのかなあ」

これも意味のない言葉だった。前者は日本語、後者はインドネシア語になった。

しかし、本当に日本人がいたら、切ない気持ちになったと思う。それは決して愛国心から発した思いではない。インドネシア人がいたとしても、やはり切ない気持ちになったろう。白人でなければ似合わない光景だと思った。1組だけいた日本人グループがビキニの水着をつけていた時はほっとした。

で、ついでに言わせていただければ、数十個(対というべきか)観察した中で、鑑賞に耐えるそれは僅か1個だけだった。中年女性が多いのだ。

「今更、なんだ」と言われるかもしれないが、私はやっぱりバリが嫌いだ。ベロンの女性に密着して、インドネシア人青年・少年が時計やアクセサリをセールスし、オイルマッサージの老婆が客を探す。ベロンの女性は許せるが、その横で服を着た人間が商売するのは許せない。おそらくそれは、大昔、ベロンの現地女性に服を着た西洋人が迫ったことと同じことだ。ヴァスコ・ダ・ガマに始まる太平洋探索の時代があり、植民地支配の時代があって、独立し、そして今、立場が逆転した形であっても同じような光景が見られる。どちらにしても服を着た人間が悪いし醜い。

服を着たままヌーディスト達を探索しているわが身を恥じつつ、「観光地は人をスポイ

ルするのだなあ」としみじみ思う。だから、やはり、バリは嫌いだ。



クタの海岸を歩くにはこういう格好が正しい

6. 巨大蝶とコブラに囲まれて

渡り廊下の円柱に蝶が留まっている。蛾かもしれないが私には分からない。近づいても動かない。赤と黒の斑模様がすばらしくきれいだ。

私はいまだにあの蝶が本物かどうか自信がない。写真を撮ったが、大きさを見比べるためのタバコを添えるのを忘れてしまった。片翼だけでも、おそらくタバコ4箱分の大きさはあったらと思う。あんな大きな羽でどうやって空を飛べるのだろうか。あんな蝶が空を飛んでいるのを想像しただけでも不気味だ。でも、あれは確かに本物だったと思う。少なくともプラスチック製の凧ではなかったと思う。



私の執務室からほんの10メートルほど離れた所にヘビが現れたという。ただのヘビではない。コブラだ。私が見たときは、すでに清掃担当のスタッフに叩きのめされて虫の息になっていたが、両手を広げた程度の長さは十分にあったと思う。

それからしばらくは職場に出るのが恐かった。あたりに注意を払いながら歩く癖ができたし、机に向かうときも腰を屈めて机の下を確認しなければ落ちつかなかった。登校拒否児童の気持ちがよくわかった。

日本から持っていった家庭用コンポスト容器を、デモンストレーションのために庭に据え付けている。容器を見せるだけでは面白くないので、実際にごみを入れて実験することにした。スタッフ2人が毎日レストランに行つて残飯を貰ってくる。容器に入れた残飯の重量を量り、容器内の温度を測る。そんな実験を1年近く続けた。

実験を始めて4カ月経つた頃だろうか、容器を設置した場所にカエルが集団発生したことがあった。どこからやってくるのかわからないが、スタッフが片付けても片付けても数十匹単位で懲りずにやってくる。私としては、<ヘビに睨まれたカエル>、カエル目当てにコブラが再び出現しないか気が気でなかった。

なんという名の虫だろうか、だんご虫とも蛆虫ともいえぬ虫が大量に発生したこともあった。持て余した挙げ句、パートナーの一人が「鶏の餌にしたらどうか」と言い出した。冗談か本気かスタッフの一人が実際に鶏を持ってきて、試食させたのには驚いた。どうやら、鶏の好物だったようで一同拍手喝采したのだが、あまりの量にさすがの鶏も食傷気味の様子だったのはおかしかった。

牛・山羊論争というのもあった。発酵促進剤として牛糞を入れようと思ったのだが、この国、牛はあまり多くない。その分、山羊なら人の数より多いのではないかと思われるほどなのだが、山羊の糞というのはコロコロ固くて見るからに発酵しにくそう。どうしたものかと悩んだ挙げ句、両方試してみたのだが、結果の程がよくわからないまま、私達の関心はもっと深刻な問題に移ってしまった。

コンポストを担当していたスタッフの一人

がチフスに罹ってしまったのだ。コンポストがいけないのだとみんなが口を揃える。臭いし、蛆虫は発生するし、見るからに不衛生だ。なるほど困ったなあとは真剣に悩んでしまったのだが、意外と非難する方はさほど真剣ではない。この国ではチフスは病気のうちに入らないのだ。

2年間の滞在で私のインドネシア人の友人・知人合わせて計6人がチフスに罹っている。ある時、秘書が無断で3日間休んだ後で、医者診断書を持参して「チフスで連絡出来なかった」と言ってきた時は驚いた。「いいから、いいから、もっとゆっくり休んでくれ」とお引きとり願ったものだった。

南国はアリが多い。甘いものをそのまま放置しようものなら、アツという間に黒い山。その頃の後遺症か、今でもクッキーをテーブルに放置しているのを見かけると、思わず「早く冷蔵庫に入れて！」と叫びたくなるのだが、そのアリと我がコンポスト容器から生まれた蛆虫とどちらが強いかが、暇なときの楽しいゲームだった。

容器から蛆虫を一匹取り出して、アリの巣の近くに落としてやる。初めは巨大な蛆虫に恐れをなしていたアリ達もやがて無鉄砲な一匹が果敢にも挑みかかる。跳ね返されても跳ね返されても食らいつき遂には巣の中に引っぱり込む。

そんな様をジッと眺めながら、「南国の仕事も悪くないか」などと思ったりしたものだ。

7. ハリーさんのこと

ハリーさんのことを書かなければならない。私の直接のパートナーではないが、環境衛生部門のまとめ役だったから、なにかにつけ会う機会が多かった。

人望があるということ具体的に説明するのは難しい。何をしても目立つ役割を担うわけではないし、伝説的な逸話を残すということもない。しかし、一般論として、人望のある人のイメージというのは、かなりはっきりしているような気がする。

まず、背が高くてもいけないし、ハンサム

でもいけない。気が強すぎてもいけないし、学歴はそこそこでなくてはならない。鋭すぎないジョークを好み、たまに鋭い人物評を口にする。金を使ってもいいし使わなくてもいいが、ケチではいけない。退屈な議論を展開してはいけないが、平凡な結論でなくてはならない。

おそらくハリーさんはそんな人だったと思う。たとえば、この国の一種原始的ともいえる伝統的な習慣とか、田舎ののんびりした生活習慣をよいものだと感じ、どうかそういうことを大切にして下さい、と日本人が言う。すると、ハリーさんは、「言われることはありがたいと受けとめるが、私たちはもっと豊かな生活を欲している。そのことに手助けをいただきたい」と答える。

それは「すごい」といえる言葉ではないが、心に残る言葉になった。現に、日本の金満技術を紹介することに迷いを感じていた私は、その言葉で踏ん切りをつけることができたのだ。

帰国間近、ハリーさんが病気になった。ちょうどレバラン休暇の頃だったので、長めの休暇を取っているのかと思っていたのだがそうではなかった。家に見舞いに行き驚いた。顔も首も手足も真っ黄色で、一目で肝臓の病気だとわかった。やがて入院し、一度腹を切りそのまま塞ぎ、しばらくしてまた腹を切りまたそのまま塞ぎを繰り返したということを知った。

帰国を2日後に控えた時見舞いに行った。粗末な病院だった。ベッドの上で胡座をかき、私の帰国挨拶の葉書を見てくれた。スタッフと一緒に撮った写真に「ありがとう、また会う日まで」という文字をインドネシア語で入れたものだった。彼が休んでいる間に撮ったものなので、彼は映っていない。

「ハリーさんがいなくて残念だった」と言うとうと、

「うん」と頷いて、「ウィディもいる、ユニもいる、ニナもいる」と嬉しそうに一人ひとりを指さした。幼児のような頼りなげな笑顔だった。そして、

「ありがとう。私たちは忘れない」と言った。

「元気になって欲しい。今度は上手くいく」

そう言うと、彼は躊躇しながら頷いたが、やがて力無く首を横に振って、

「インドネシアの医療技術はひどいものだ。切ってそのまま閉じるという失敗を2回も犯すなんてことが信じられるかい。日本だったらこんなことは絶対ないよな」と言った。そして、

「ここはインドネシアだ」

初めて彼らしい言葉を口にし、彼らしい表情で笑った。

ふと気が付くと、ハリーさんがインドネシア語を話している。2年間で私は一度も彼のインドネシア語を聞いたことがない。外国人と接する時は、例の早口、巻き舌のペラペラ英語を押し通すというのが、ハリーさんのスタイルだったのだが、その日は一言も英語を話していない。

「私たちは、きっとまた会える」

英語でそう言うと、

「I hope so」

手を握った。

帰国して数日後に訃報が届いた。3回目の手術をした翌日のことだったという。

「ここはインドネシアだ」

そのことだけで、人ひとりが死んでしまった。

2年間でもっとも悲しい出来事になった。



離任時の記念撮影、ハリーさんは映っていない